

芹澤光治良作品集

第四卷

愛と死の書 サムライの末裔

芹澤光治良



新潮社版

愛と死の書・サムライの末裔

〈芹澤光治良作品集4〉

昭和49年7月10日 印刷
昭和49年7月15日 発行

定価 800 円



著 者 芹 澤 光 治 良

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

東京 都 新宿 区 矢 来 町 71
電話 業務部 (03) 266-5111
編集部 (03) 266-5411
郵便番号 162 振替東京 808

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1974 Printed in Japan

落丁・乱丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

愛と死の書

5

愛と死の蔭に

113

サムライの末裔

187

装
画
司
修

芹澤光治良作品集

第4卷

愛と死の書

第一章 菊の花章

全く夢のような気がします。

漸く二、三カ月前のことでした。シベリアを經由して、やっと日本に辿りつき、下関で上りの特急に乗りこんで、食堂車にはいると良人はふと歎息しました。

「ああ、こんな文化を、世界に宣伝する事務局へ、勤めるために帰るなんて、情けない気がするな」

「こんな文化？」

私は聞き咎めました。その心がくめずに、良人の視線を追うようにして、周囲を見廻しました。食堂車の中は、上衣を脱いで、胸毛までのぞかせたり、着物の裾を臍の方へ高くはしょったりして、無作法な恰好する者、あちらこちら卓子越しに話しかける者、実にさかんな光景でした。それに、大変蒸暑い日でもありました。

「形にとらわれてはいけませんわ」

そう、私は微笑を応えました。それまで、ジュネーブにいて、良人のお勤めの方は存じませんが、私の方は、みがついた鏡の上に坐って、襟を正すような息苦しい朝夕でした。浴衣がけて、夕涼みのできるような気軽さを、すぐに文化

というような、だいそれたことに結びつけて、石を積み重ねたような、重いあちらの外形と比較して、歎息するのは、大袈裟で可笑しい——そんなつもりで、微笑したのですが、「いいや、形にとらわれてはいないよ、それなら、わが文化なりとして、何を宣伝したらいいのか。またしても、お茶か、お花か、浮世絵、歌舞伎、お能か……しかも、これらが現代の日本の生活のどこに生きているのだ。この人前で半裸体になれる人々のどこかに、精神的なりと得意にする、例えば、お茶の精神が、感じられるかい……」

こんな風にまくしたてたのも、実は、日本へ帰った安堵や喜悅を、隠しきれなかったからに過ぎないのでしょう。考えれば、日本へ帰りたい日が多かったもの、特に、日本のお好きな良人には。

胸の病氣をした折など、私は面倒な人々から遠く離れて、呑気に療養できることを、却って幸福であるとして、喜んでいましたのに、良人は、会いたい人にも会えなからう、日本食でなければ肥れないだろう、ああ、日本の空気を呼吸したらば、胸の病氣など、一度になおるだろうにと、こちらがお氣の毒に思うくらい、不憫がり、外国に勤めることを、さもご自分の過失のように、詫びるしまつでした。

日本へ帰った最初の夜の事です。お姑様独りで守っていた、良人には馴染深い家のお二階で、真新しく換えた畳

の香を、腹這いになって、かぎ廻ったような狂気じみた調子も、今考えますと、いくら日本がお好きだからとて、不吉な不安をかもしていたものでした。

「そら、日本へ帰ったぞ、若子、日本に本当に帰ったんだ」

まるで、書生さんのように、私に飛びついて来て、軀をかかえて、ダンスでもなさるるように、座敷中をぐるぐる廻るさわぎに、私も嬉しくて、呆れたように笑っていたようにしましたが、がたびししそうな古いお二階で、さぞ階下のお姑様が仰天なさるでしようと、そればかり気になって、良人を睨んで、たしなめてみました。

「お姑さまがいらっしゃることよ、階下に」

「つまらないことに、こだわるやつだな」

そう、さもつまらなそうに、畳の上に、大の字型に寝られたが、酒に酔っても、決して身を崩したことの無い良人が、白面で、そんな真似をなさる様子が、見るから微笑ましくて、日本に帰ったことがそれほどまでに喜ばしいのでしょうかと、実際には、私とて劣らず嬉しいのですが、そう疑う気にもなりませんでした。その時、偶然、良人のおなかに動悸が波打つようなのに、初めて気付いて、おやっと思を見張りました。しかし、洋服暮しのこの何年間というもの、夫婦でありながら、良人のおなかを、こんな風に、間近く

見る機会がなかったからこそ驚くのだと、軽く解釈して、波打つ動悸から、すぐに健康の衰弱を連想する前に、浴衣がけの功德でしようと、良人のお臍を眺めて、苦笑してしまいました。

「何が可笑しいんだい」

「ごらん遊ばせ、お姑さまでしょう、やはり、あの足音は」

階段にみしみし軋る音をさせて、実際にお姑様が上って参りました。

私には厳しい良人ですが、お姑様には可愛い坊やでしようか、好物の奴豆腐の食べ方が足りなかったし、ご飯も二膳しかかえなかった、四十前の若い者が（もう四十を越しているのに、お姑様は年齢まで若くごらんになって）そんなで、どこかお悪いのじゃないかえ、随分瘡をなすったようだが——と、家中、どのお部屋も、風通しのよいようにと、襖を簾戸に換えて、どこにも隠れ場所もないのに、こちらの胸に、戸をたてる余裕のないほど、お姑様は私たちの生活にはいりこもうとなさる。その気疲れで、私は良人が本当に瘡をなしたのかしらと、心を配るよりも、お姑様のお言葉に刺を感じて、思わず顔をしかめてしまわすつでした。

こんな調子では、折角私たちの帰国をお待ち下すつたに

しろ、どこか身軽くアバウトマンへでも、移りたいものだと、願うようになりました頃——と申しまして、帰朝して、二週間にもならなかったのですが、お勤め先では、疲労を勞うおつもりらしく、夏休暇をすぐに取るようにとご親切な申し出で、これさいわいと、軽井沢の小さい貸別荘へ逃げることにしました。

たった二人で暮しますことは、結婚して十何年たっても、楽しいことに変わりありません。子供がなくて淋しからうと、他人様はご挨拶のように、いつも言ってくれますが、子供を持った経験のない者には、子供のある者とは別の世界があるのでしょうか、淋しいどころか、良人は幾分私の子供であり、私はまた幾分良人の子供であるような、生活の仕方があります。その上、十年振りに解放された日本の生活や自然に、戯けのように何も考えずに、とけこみたいとも願いました。ちょうどその頃、北支に起った事変が、日本の不拡大方針にも拘らず、日華事変へとじりじり変化して行きましたけれど、高原にいましては、その事変も新聞にしかないようですし、それに、東京より一日遅れの新聞記事には、興味もすくなく、平和な異邦人のように、腕を組んで高原を歩いてばかりいました。言ってみれば、新婚の日のような鮮やかな二人の生活でした。

「僕でも召集されないと、事変だって気にならないかも知

れんな。悪いコスモポリタンになったものだ」

良人は、時々お勤め先のことやお仕事のことが気にかかるらしく、浮かぬ表情をなさっている日もありました。私も、事変や仕事のことはなく、良人の食欲が私よりも尠ないことや、意外に疲れ易く、曇りがちなお顔色のことなどに、気をとられて、ふと不安に襲われることがありました。風邪ひとつ引いた例のない健康体ではありますが、不思議なことに、日本に帰ってからは、良人の肉体や健康に注意が向いてしかたなく、これはお姑様の悪い暗示にかかったのかしらと、反省してみますが、とにかく、私の幸福が、それこそ、良人の肉体にかくされているような、熱っぽい感情で、胸一杯になるのです。確かに、良人独りを生きる頼りにしておりますが、これでは、あんまり結婚したての女のようにだと、恥ずるのですが、もうどうにもなりません——

「どうしたんだ」

その不安が、良人の胸にも感應するものとみえまして、突然、私の顔を凝視して、そう問われますが、

「あなたの体格で、どうして、徴兵がのがれたのでしようかと、考えたところ」と、ごまかしました。

「あの頃は軍縮時代だったからさ」

どこかに脆弱なところがありになったからでしょうか

と、不吉なものをさぐるようになりました。しかし、他方

では、いいやそうではない、スイスにいる間、こんな風に、いちいち食欲を計量したり、疲労状態を観察したりするほど、目と鼻とを間近くつけた生き方をしないで、言ってみれば、二人とも、間違つた異国風に、日常生活にも礼服を脱げなかったからこそ、気付かなかつたのでしょうか、この食欲、この疲労が、四十二歳の男子の、まあ、常態であるかも知れない、ただ、近頃私の方がむやみと健康になつたので、相対的な感じ方から、愚かしい錯覚に陥ちて、無用な心配をするのでしよう——そう考えては、秘かに不安を払いのけていました。

そんな或る朝、名古屋の実家から弟が応召するという電報を、突然受け取りました。

「そら、軀に火がついたぞ」

そう、良人は冗談を申しましたが、残暑の九十度（華氏）近い名古屋へ、弟を見送りに参つたからとて、益もなし、残り勘ない休暇を良人とたのしみたいと、出掛けるのを多少渋りました。良人は一緒に東京へ出て、帝大病院で健康診断をしたらうから、その間に、名古屋へ行つて、帰途に東京で落合つたらと、熱心に勧めます。それなら、やはり何か自覚症状でもおありでしょうかと、益々弟の応召どころではなく、良人の健康が心配で心配でたまりませんで

した。

「悪いところはないよ。長い間、外国生活した後だから用心だ。それに、日本流では厄年だからね」

そう笑つて誘いますから、そうかしらと、とにかく、一緒に東京まで帰つてみました。上野駅も東京駅も応召兵の出発で、もうはちきれそうな興奮状態です。それではじめて、応召の意味が分つたよきな氣もして、それに捲きこまれて、良人の勧めるままに、私独り急いで名古屋行きの急行に乗りました。

東海道筋の戦時気分は、やはり出て来てよかつたと、心を緊張させましたが、実家でも、私の結婚当日よりも混雑した賑わいで、どのお部屋にも、めいめい違ったグループの酒宴がはられて、広い家に足の踏む場所もない有様でした。ちやうど、駅からの自動車が家の前にとまりました。折、輜重兵の一隊が馬と兵車とを連ねて長く続いて、暫く車から降りることもできませんでした。聞けば、熱田神宮に参詣するそうで、前夜から殆ど絶え間なく続いているとのことでした。残暑がきびしくて、兵隊は帽子の下から日覆をたれ、重い足取りで、馬の手綱をもつて、黙々と進んでいるのです。みな小柄で、服装の関係でしようが、少年のように若くて……ああ、戦争だったと、私は胸のせまる思い

で、輕井沢での私を愧^はじたくらいです。そして、家にかけてこむなり、奥の座敷にいた両親の前に、べったり坐^まつてお辞儀をしたきり、言葉が出ませんでした。

父はふだん別荘にばかりおりますが、前夜からずっと本宅にいて、目出度^{めでた}いお祝いだといつて、迎えてくれましたが、母にはたった一人の男の子、勿論^{もちろん}お国のために名譽なことはありますが、私は附^か甲斐^{がい}なく、母の顔を見れませんでした。母も落着^{おち}かなく、あちこちのお部屋を見廻^もつて、私と顔を合わせるのを避けるご様子、涙を出すのを怖^{おそ}れたのでしよう。

弟は頑丈な軀^{からだ}に裸のまま、楽しげにあちこちの酒席^{しやく}を廻^{まわ}つて、見るから頼^{たの}もしく、これなら北支^{きたし}であれ、上海^{シャンハイ}であれ、安心して見送れると思いましたが、しかし、いつの間に堂々たる大人になり、図太^ずい神経を備えたのでしようと、私は外国で過した十年が、それこそ白紙^{しろし}のようで、嬉しいやら、悲しいやら、しかも少尉^{せうゐ}殿^{だん}とかで、軍服、軍刀、長靴^{ながぐつ}、ピストル、双眼鏡^{そうめがね}、軍用行李^{きゆうりやう}といろいろとそろえて、花婿^{かけ}のような大がかりな支度でしたが、私には、まだサーベルを持って戯^{あそ}れて、いつも叱^{なぐ}りとはしたような弟が、記憶に鮮やかなあまり、この物々しさが、嘘^{うそ}のようでもあり、滑稽^{こっけい}でもありました。

「姉さん、義兄^{ぎけい}さんは？」

酒席^{しやく}から抜けでて、廊下の向うで手招くものですから、近づいてみますと、弟は酒臭^{さけくさ}い息を吐くように、そう囁^{ささや}いて、お離^{はな}れになった洋間に招^{まね}じ入れ、さも疲れたように掛けました。

「ママ達には内証^{うちしやう}ですが、帝大に入院するかも知れないの。病氣^{びやうき}はなんでもないけど……だから、来れなかったの、ご免なさい。春さんもお酒で疲れてはだめよ」

「義兄^{ぎけい}さんに遺言^{いごん}して、後を頼^{たの}みたかったが、姉さん代^{しろ}って聞いてくれる？」

「遺言^{いごん}なんて、若い者の口^{くち}にすることじゃありませんよ」

「戦争^{せんそう}だもの……ママには言えないが、戦死^{せんし}する覚悟^{かくご}だからね」

「戦死^{せんし}の場合^{ばあひ}なんか考えるものじゃないわ」

「でも、姉さん、出征^{ししやう}する者^{もの}には戦争^{せんそう}は死^しを意味^{いみ}するんですが、姉さんには分^わつてもらえと思うがね。それは父や母には……みんなお目出度^{めでた}いと祝^{いわ}つてくれるから、言^いってはいかんと思^{おも}つて、義兄^{ぎけい}さんが来たら、いろいろ話^わして頼^{たの}んでおきたかったんだが——」

陽氣^{やうき}そうにしていた弟の真剣^{まけん}に變^かつた表情^{へいしやう}に、私はしろもどろして、

「凱旋^{がいせん}するのよ、やな春^{はる}さん」

そう、肩^{かた}を叩^{たた}いて笑おうとしましたが、顔^{かほ}が硬張^{こうぢやう}つてし

まい、はしたない手つきで、のめない哀に火をつけて、深刻な相貌になりそうな場面をつくろったのです。

弟は出征中に父の亡くなった場合、母の亡くなった場合、戦死して父のある場合、戦死して同時に父の亡くなった場合、いろいろの場合に分けて、いちいち家の処置について詳しく述べるのです。それが、また、高原からおりてきた私には、しっかり覚えきれぬか、あやしいほど詳しくて複雑です。日頃、何事によらず樂天家の弟が、召集令を受けてから二、三十時間に、それも酒宴につらなりながら、それほど考えたということに、出征しない女には不可知な、戦争の持つ意味が、ぼんやりながら感じられるようで、私は肅然として、弟の顔を凝視しました。しかし、それとともに、後のことは後の者に委せて、気安く行ってくれたらと、これも男子に課せられた業かしらと、疑ってしまいました。実際、母には私と弟しか子供はなく、弟がけにもはれにも独り息子ではありますが、外にできた弟や妹を家へ引きとって、養育しておりますから、

「僕には子供はなし、姉さんの方にもなくて、困ったですね」と、最後に歎息する弟が、分別くさくて愚かなことと思われましたが、腹のちがった弟や妹は、やはり、なじまないものかしらと、哀れにもなつて、

「凱旋して、結婚しなすのよ。子供なんか、それからの

こと」と、慰めてみました。

「それで、たづ子の方だが、この際に綺麗にして、安心して征きたいが――」

「あら、まだかたがついていなかったの」

「親爺に一万円出すように、姉さんから話してくれないかなア」

私は呆れて弟の顔を見ました。

弟が見合結婚する頃、遠くジュネーブに來た手紙には、どれもこれも、相手の家柄や父親の履歴や親戚関係ばかり詳しくて、肝心な本人については、真面目なおとなしい娘だとか、知らせがありませんでした。日本にいますなら「春さん、あんた、その娘が好きになれそう？ あたしが見てあげなくていいかしら」と、注意したいところですが、何と申しても、手紙さえ一カ月を要するところ、ただ二人が愛し合えますように、祈る他にありませんでした。それに、私の場合から想像しましたが、家柄を重んずる都会ですし、特に長男の嫁のこととて、選択の範囲も限られておるでしょうし、見合いしてその娘を選ばなければ、また候補者を選ぶのに相当な月日がかかることから、結婚を急ぐようなことはないかしらと、心配もしました。

結婚式の写真を見て、良人は、愛情の渺ない娘ではないかねと批評しましたが、私も写真を見た瞬間の印象を言い

あてられたように、狼狽^{うろた}して、結婚式には厚化粧して、表情を殺してしまふからと、弁護して、強^いいて不安を消そうと努めました。その後、たづ子さんからもお手紙が参るようになりましたが、何流というのでしょうか、立派な毛筆ではありませんが、若い女らしい胸のときめきも伝えない、ただ、いつてみれば、お義理であるからと心得て、印でおしたような挨拶代りのお手紙ばかりで、ああおとなしい以外に取得のない娘さんなんか、駄目かしらと、却^{かえ}っていらして、こちらからも、愛情のこもる言葉が、返せませんでした。

間もなく、母から、夫婦仲が冷たいらしい模様を心配そうに伝えて、それも、異母妹の浜子や久美が家^{いへ}にいて、何かと若夫婦の間に水をさすように困ると、くどくど書いて来ました。ふだん、義理のある子供について、不平一つ言つたことのない母のことですから、異様な感もして、あの意地悪いおつねさんの娘が、年頃になつて二人もいては、たづ子さんも大変でしょうと、同情を寄せたり、母も嫁と義理ある娘との間に立つて苦労しているでしょうと、遠く気を揉^もんだりしました。

続いて弟から、たづ子さんに生理的欠陥があるために、結婚生活が不幸である、と懇^{うん}えて来ました。

——見合いした時、そこまで知る方法はありませんでし

たからと、そのせつない言葉に、弟らしい滑稽さを感じて、思わず噴^{はな}き出して、こんな場合に笑うのは女の残虐性だと、きつく良人にたしなめられました。その生理的欠陥と申すことが、実はよく分りませんでした。誰にも秘密にして、夫婦二人が顰^{しりぞ}め面^{めん}を突き合せているような様子が、哀れにも、また、もどかしくもありまして——先方のご両親によくご相談して、早く治療していただき、仕合せな結婚生活をしなくてどうしますと、肩を叩^{たた}かんばかりの調子に手紙を書きまして、東洋向け郵便物の締切までに三日もありますのに、一刻も早く忠告したさに、すぐに郵便局へあわてて駆けつけました。その時ほど、弟への愛情の激しさを感じたことはありません。それが、もう、かれこれ、二年近く前のことです。

それから、たづ子さんが実家に帰って治療していると、便りがありました。どうも治療の結果も面白くないという消息が続きました。離婚すべきではなからうかと相談がありました。もとより、私としましては、不賛成を説^とえる筋もございませんでしたし、その後半年以上もお話がないのですから、離婚が円満に成立したものとばかりきめこんで、気にもとめず、たづ子さんに終^{はつ}にお会いする機会のないかたのを、清々^{すがさ}しいことに思っていた次第ですが——「今日お仲人^{なこうど}を訪ねて、出征するまでに、離婚を承諾して

もううように頼んだところ、一万円出して欲しいという話です。手切れ金のつもりでしょうね。親爺に出してもらって、さっぱりしたいんですが」

「あんたもお馬鹿さんね、本人がこのこ出掛けずに、誰かに委せるものよ。生理的欠陥ってなんなの？ それが結婚を不可能にしたんじゃない？」

「発達不完全でしょうね」

「そんな軀で結婚する方が不都合じゃありません？ 手切れ金なんか無茶ね、お父さまが承諾なさるかしら」

「それが難かしいから頼むんですよ。ただ、妻だった女の生理を、口にするのは憐れだし、また穢ないし、それで他人にも頼めなかったが、金ですまされたいと、向うが言うのなら、綺麗にした方がいいんだがなア」

「あんた、まさか、他に好きな人でもあるんじゃないでしょうね」

私も神経がたかぶりましたが、悲痛に唇をかんだ弟を見ますと、こんな心境のまま戦地に送っては可哀相でなし、恐ろしい気もして、とにかく、父にお話して円満に解決しますからと、約束しました。それで、弟は安心したように、ああ、疲れたと笑いながら、再び酒席に戻って行きました。が、私はとてもそこから動かれず、卓子に顔を伏せて、じっと考えに沈んでしまいました。

窓の下のプラタナスの並木路には、着いた時見たと同じ輜重兵の行軍が続いているのでしよう、重い車と馬の脚音が絶え間なくして、時々、万歳、万歳とはるかに響くのでした。ああ、本当に戦争だったことも知らなかったと、いつまでも身をすぼめていました。

夜遅くなって、東京から電話だと呼ばれました。良人からでした。

「――立野君も立会って診てくれたが、軽微な胃潰瘍らしい、入院して、徹底的に手術してもらおうつもりだよ……心配のことなんか……いつ僕等まで、召集されるか分らないし、人間四十からって言うからな」

「手術ですって？ 簡単にできますの」

「こんな場合は医術に委せるさ、君の療養していた時、よく言ってたろう、あの大乗的精神って奴さ、自我をすてて委せきる、あれさ。春さんはそこにいる？ お別れしたいから……君はゆっくりして、僕の分までいてあげなさい。君がサナトリウムにいた時と同じで、病院は独りの方がいいからね」

われにもなく受話器の前で、涙声を出しましたが、良人は陽気に諧謔を混えていますし、弟を呼んで代りますと、弟も電話口で、笑って話していますから、良人の病氣もたいたことではなく、普段健康なだけに、病氣だと聞いて